こ と ば

―仏教語のこころ―

藤澤量正

[011]

本願寺出版社

増補改訂版の出版にあたって

時の経つのは早いもので、前住職・藤澤量正が平成二十四年七月一日に往生してから、まもなく三度目の夏を迎えようとしています。このたび、前住職が生前に本願寺出版社より上梓していました『ことば―仏教語のこころ―』を、増補改訂の上、新書シリーズに加えていただくことになりました。平成十九年の初版発行からすでに八年が経過し、再版を望む声が多かったということをお聞きし、このような形で出版していただけることをたいへん光栄に思います。

前住職は言葉に対して繊細で、鋭敏な感覚を持ち続けた人でした。ですから『ことば―仏教語のこころ―』を出版するに際しても、「仏さまのことば」の持つ奥深さを、いかにやさしく、また味わい深く伝えていくか、ということを自らの課題にしていたよ

うに思います。今回の出版にあたり、もう一度この本を読み返すなかで、引用してある幅広い分野の書物の文章に触れることによって、前住職があらゆる角度から仏さまのお心を伝えたいと願っていたということを、あらためて気づかせていただきました。一つひとつの言葉の解説が、言葉の持つ意味の解釈にとどまらず、その言葉の持つ奥深さや、その言葉がどのように人の心を動かしたかというところにまで触れられており、その一篇一篇が、生きていく上で大切なことに気づかせてくれる、短編法話集のような内容になっています。

この本を読み返しているうちに、お釈迦さまのこんなエピソードを思い起こしました。伝道の旅を続けておられたお釈迦さまに対して、一人の農夫がこのように言葉をかけました。「私はこうして土を耕し、種を蒔き、そして収穫をして生活している。あなたも耕してみたらどうですか」と。その時、お釈迦さまはこのようにおっしゃいました。「私も耕していますよ。あなたは土を耕します。私は人々の心を耕しているのです」

と。

お釈迦さまは、智慧の眼を開くことによって、すべての束縛から離れた悟りの境地に到達されました。そして、そこから紡ぎ出される温かいお慈悲あふれる言葉によって、私たちの心を耕し、その光り輝く、心豊かな世界へと導いてくださいます。『ことば―仏教語のこころ―』を新書シリーズとして出版していただくことで、仏さまの心が一人でも多くの人に伝わる一助になればと願ってやみません。

前住職の伝道に対する熱意が伝わるように、そして読者の便にも資するようにと細かいところまで配慮し、編集作業を進めてくださった担当の方に、厚く感謝申し上げますとともに、この本の出版に関わってくださった皆さまに、心より感謝申し上げます。

浄光寺住職　藤澤　信照

ことば ―仏教語のこころ―　目次

増補改訂版の出版にあたって　3

第一章　人生の背景

大悲＊だいひ　15
真実＊しんじつ　19
智慧＊ちえ　24
南無阿弥陀仏＊なもあみだぶつ　29
信心＊しんじん　34
他力＊たりき　39
聴聞＊ちょうもん　44

第二章　仏はみ名となりて

遇法＊ぐうほう　51
回向＊えこう　57
生老病死＊しょうろうびょうし　64
聞名＊もんみょう　69
弥陀＊みだ　74

第三章　娑婆を生きる

生死＊しょうじ　85
懺悔＊さんげ　90
自力＊じりき　94

煩悩＊ぼんのう 98
無明＊むみょう 102
地獄＊じごく 107
娑婆＊しゃば 111
凡夫＊ぼんぶ 115

第四章 いのちに帰して

往生＊おうじょう 123
後生＊ごしょう 127
極楽＊ごくらく 131
涅槃＊ねはん 136
弘誓＊ぐぜい 141

語註 147

あとがき 171

新書（増補改訂版）へのあとがき 174

『浄土真宗聖典（註釈版）第二版』は『註釈版聖典』、『浄土真宗聖典 七祖篇―註釈版―』は『註釈版聖典（七祖篇）』と略記しております。

第一章　人生の背景

大　悲 ＊ だいひ

かつて『天の夕顔』で多くの読者を得た中河与一[※]は「愛は惜しみなく与ふ」という文章を発表しました。また幾多の名作を残した有島武郎[※]は、「惜みなく愛は奪ふ」というエッセーを世に問うて、世間の注目を集めたことは、よく知られているところです。

愛は、たしかに「惜しみなく与える」という美しさを持つことは誰も否定はしないのですが、反面「惜しみなく奪う」という醜さを持ち合わせているのも事実です。人間の世界では、愛が成就されなければ憎悪と変わるかなしさを持つことを思えば、人は、愛憎のくり返されるなかで生活を営み、苦悩しているといえるのです。仏教では、貪愛・渇愛・欲愛などといろいろ語られていますが、いずれも執着や欲望をあらわす煩悩であることに変わりはないのです。

それに比べて慈悲には、奪う、憎む、恐れる、ということを持たない至純なこころが流れています。本来、慈は友愛をあらわし、悲は呻きとか同感のつぶやきをあらわすことばと言われ、「苦を抜き楽を与う」ものであると説かれています。

※浅原才市翁は、

くをぬいてく太さるじひが
なむあみ太ぶつ
くをぬかずともくださるじひが
なむあみ太ぶつ

（鈴木大拙編著『妙好人　浅原才市集』四五〇頁）

と詠っていますが、これこそ如来の慈悲そのものを的確にあらわしたものだということができます。

いま大悲とは、まさに仏の大悲心のことであって、大という文字が用いられてあるのは、底知れない仏のめぐみをあらわしているのです。あらゆる手がかりをもって一切の衆生を救う、その広大無辺のすがたを大悲心と呼ぶ以上、それは如来の心を措いて他に求めることはできないのです。その大悲が名告りとなって、その声に私たちが喚びさまされたときにこそ「苦をぬかずともくださる慈悲」に安住できる身となるのです。苦があって苦が越えられる道を得た人生、それを無礙というのです。

何年か前のことです。北九州市のお寺にご縁を結んだとき、

大悲無倦みぞれのなかをひとりゆく

という俳句を見せてもらったことがありました。大学を卒業したばかりの一人息子を事故で失った元小学校長の作品であるということでありました。